

梅崎春生「ボロ家の春秋」論

——東西冷戦、朝鮮戦争を背景に——

高木伸幸

はじめに

梅崎春生の「ボロ家の春秋」（昭和二十九年八月『新潮』）は、築三十年以上経過したアバラ家に偶然同居することになった二人の男たちが、さまざまな騒動を起こす様を描いている。いかにもユーモラスなこの小説について、これまでその寓意性、諷刺性の有無に関する論議が繰り返して為されてきた。

まず発表から間もなく、佐々木基一、白井吉見、阿部知二の三氏による「創作合評」（昭和二十九年九月『群像』）で、佐々木氏が「結末の方になると、なにか寓意みたいなどころがあ」って「日本の左翼政党とかあるいは民主的団体なんかの内輪争いみたいなものを寓意したんじゃないかというふうに考えた」と述べた。しかし白井氏は「まさか寓意ではない

だろう」と言い、阿部氏は「作品としてはそういう意図がないのがこの場合正しいと思う」と述べ、ともに佐々木氏の意見を否定している。

次いで中井正義氏は「梅崎春生論」（昭和四十四年七月、虎見書房）の中で、他人に対して「無抵抗」な二人の男たちの関係のあり方に注目し、主人公の「僕」は日本を表していると指摘した。そして「日本人気質への『憎悪』が底に流れ」、「日本の宿命的な悲劇、日本民族への絶望を諷刺した」小説だと論じ、肯定的に評価した¹⁾。

さらに和田勉氏は「梅崎春生の文学」（昭和六十一年十一月、桜楓社）の中で、梅崎が「この時期、諷刺小説に関心を示していたこと」を認めつつも、「社会的な側面を考慮に入れたの諷刺と捉えるには（『ボロ家の春秋』は）曖昧」だと記し、中井氏の論とは異なる見解を出した²⁾。

梅崎春生がこの小説で諷刺を狙ったか否か、結論としてその意図はあつたと言ふべきであらう。しかもそれは、佐々木氏や中井氏が述べたような、日本の有り様に関する寓意でなく、発表当時の国際情勢にまつわる諷刺であらうと考えられる。もつともその諷刺性は、和田氏が記すように、あるいは「曖昧」なもので、必ずしも主要なモチーフでないかもしれない。がしかし、それについてここで問う必要はない。諷刺の程度の強弱は、各自の主観に委ねるところが大きいからである。むしろ市井の日常を描いたその物語の裏側に、より大きな諷刺性を積極的に読み取っていくことで、この小説をいまま少し奥行きのある作品として捉え直すことが可能になり、ひいては梅崎春生の評価を見直すことにもつながるのではないか。以下、少し考察する所以である。

語り手兼主人公の「僕」はスリの被害に遭つた不破数馬を助けたことがきっかけになつて、不破夫妻が暮らすボロ家の一部屋を間借りする約束をした。家賃は月に五百円という安さ、しかし権利金は四万円という高額の契約だつた。ところがそれから一週間後、不破夫妻は赤穂まで先祖の墓参りに行くとの理由で「僕」から二千元借り、そのまま失踪してしまふ。代わりに「僕」の前に現れたのが、顔中に疣のある男、野呂旅人であつた。野呂は不破から十四万円の家を買

取る契約をし、四万円を手付けとして支払つたと言ふ。結局「僕」と野呂はボロ家で同居することになつた。板の間を挟んで、「東側」の四畳半が「僕」の部屋、「西側」の四畳半が野呂の部屋である。加えて、二人が出会つたその日、「僕」と野呂の前に陳根頑という肥つた台湾人が現れる。陳は自分も「不破君に十八万円の貸しがあ」と言い、「被害者同士」として、いろいろ対策を立てようとの理由で、自分が経営する中華飯店「タロコ亭」に二人を招待し、大いに御馳走をふるまう。そしてあやしげな老酒をさんざん飲ませ、躁狂気味にさせて油断させたところで二人に書類に署名、捺印させて、「僕」と野呂は未だ不破の名義であるはずのボロ家について、陳を家主として家賃四千元を毎月支払う不当な契約を結ばされてしまつたのである。しかも、金の取り立てには、陳の手下で、小林拳法の名手である孫伍風が来るので、二人は支払いを逃れられなくなつてしまつたのである。

やや長くなつたが、「僕」と野呂は以上のようないきさつを経て、また不当な条件を呑まされた上でボロ家に同居生活を始めるに至つた。「僕」と野呂は同じ不破数馬から当時としては高額の金を騙し取られた「被害者同士」であり、しかも陳根頑から二人してやはり金銭上の騙し討ちに遭つた関係にある。ボロ家での「僕」と野呂の暮らしぶりを描きつつ、梅崎は簡単に騙されてしまう人間の姿を、その人物同士の関係を表そうとしたのではないかとまずは考えられる。

實際、野呂の人物像は「僕」の目を通して、例えば「頭も切れる方じゃな」とか、「鈍感な男」であるとか、「マヌケ」だとか、「蒙昧な男」だとかいった具合に描写される。いかにも騙されそうな男であることが繰り返し強調されているのである。また「僕」については、物語の終盤に次のようなエピソードが記されている。

野呂が密かにボロ家を自分の名義にして「僕」を追い出そうと企てていることを知った「僕」は、野呂に対抗する方法として、もし万一家が野呂の名義になった場合、不破時代から固定資産税が滞納されていたことを理由に税務署が家を差し押さえることができ、そうすれば野呂の所有の権利を無効にできることを税の徴収員から教わる。「僕」は勧められるままに差し押さえの運動費として五千円を支払い、徴収員は「赤鼻をピクピクうごめかせ、にんまりと笑いながら、五千円をポケットにしま」った。「僕」がまた詐欺の被害に遭ったことは明らかであり、野呂を「マヌケ」と笑う「僕」自身が、野呂以上に騙されやすい人物として戯画化されているようである。

このような二人の同居生活について、「僕」は次のように語る。

僕ら二人はお互いに対しては意地を張って頑強にねばるが、もともと二人ともひとりよがりの世間知らずなので、他人に対しては全然無抵抗と言っているほど弱いので、

です。現に不破や陳根頑や孫伍風から、僕ら二人は赤児の手をひねるように軽くイカれた前歴があるわけですから、今後何か起っても同じコースをたどるでしょう。

先述の中井氏の論考も実は右の言葉に注目して記されていた。しかし中井氏が指摘する諷刺性の有無については後で検討する。ここでは「僕」と野呂について「二人ともひとりよがりの世間知らず」である故に「他人に対しては全然無抵抗と言っているほど弱」い人間だと説明していることに注意したい。つまり「僕」と野呂は、周囲から騙され、不利益を被らされるという意味において、ある種の社会的な〈弱者〉として描かれているとも考えられるのである。二人の同居は〈弱者〉の寄合いとして設定されていると言ってもよいだろう。加えて、「僕」と野呂の関係について「お互いに対しては意地を張って頑強にねばる」という言い方もしているのに注意したい。確かに「僕」と野呂は互いに「意地」を張り合っており、それ故ますます周囲から不利益を被らされていく傾向が強いように見えるのである。

例えば「僕」と野呂から家賃を取り立てていた陳根頑が、二人に向かってボロ家を十万円で売却したいこと、しかも三十日以内に支払えない場合は立退き費「一人宛一万円」をもって立退いてもらうことを一方的に通達してくる場面がある。その際に、「僕」は「愕然とし、また茫然と」させられたが、もともと不破から家を買収する予定であった野呂は、

その話を「割に平然と」受け入れ、むしろ積極的に自分が「買うことにしよう」と考えた。二人の反応が大きく分かれたのであるが、そもそもこの陳の要求は、家の名義が不破のままで買い取らせようとするものであった。しかも「今後（中略）権利書に関する一切の問題に関しては不破数馬と陳根頑との間に於て解決す」という理不尽な要求をも呑まねばならぬものであった。このような要求に応じることは、およそ賢明とは言い難く、この件に関しては、「僕」が述べているように、「二人で相談し合うのが当然」であり、「被害者同士」として「仲良く団結してことに当」たるべきであつたらう。にもかかわらず野呂はボロ家を買取ることを、それも自分一人で買うことを主張した。それは野呂の「蒙昧」さ、「マヌケ」ぶりを示すとともに、「僕」に対して野呂が強い「意地」を持つているからだと言うほかはない。そして奇妙なことに、そんな野呂に対して、「僕」も「こんりんざい」この家を野呂だけに所有させてやるものか」という「意地」をもって抵抗するのである。野呂は「立退き料を四万まで出」すから「自分に買う権利を譲つて呉れ」という妥協案を提出するが、「僕」はそれにも同意しない。そして次のように思う。

四万円貰つて立退けば、こんな身勝手なワカラズヤと同居しないで済む。そう思つて、よほど首を縦にふるうかと考えたのですが、イヤこが我慢のしどころだと頑

張つた。人間の意地なんて奇妙なものですな。

損得の勘定を忘れて、自らのプライドを保とうとする「僕」の「奇妙」な「意地」がここに認められる。そしてこの「僕」の「意地」と、野呂の「意地」とが、頑強に張り合つた結果として、二人は五万ずつ、合計十万円を陳根頑に支払い、名義は不破のまま家を買取らされてしまったのである。二人の「意地」が二人で協力し合つて対処することを妨げ、被らなくてもよい不利益を被らされてしまったと言ふことができる。

もう一点、物語の結末近くの場面を見てみたい。「二人の」にらみ合いの状態」が「えんえんと続いて行く」のを「僕らの家の地主」が「強く望んでいる」ことが記され、その理由について「僕」が次のように説明するのである。

（前略）先に申し上げた如くこの家はこわれかかったボロ家で、早いとこ補強工事をしない限り、地震か台風かで早晚居住できなくなるでしょう。二人がにらみ合つている限りは、家の根本的な補強工作は成立しない。（中略）そうなれば家の崩壊の時期は早くなります。その崩壊の時期の一刻も早く近づくことを、この地主は切に待っているのです。崩壊さえすれば、もう彼は僕らに新築は許さなんでしょう。地所を他に高く売り払うか、万一新築を許すとしても莫大な権利金を要求するにきまつています。

二人の「意地」の張り合いが、自分たちをより苦しい立場に追い込んでおり、近い将来には決定的に大きな不利益が彼らを見舞うであろうことがここに暗示されている。

以上より、「ボロ家の春秋」は、「僕」と野呂の関係、すなわち「世間知らず」の人間同士の「意地」の張り合いを描きつつ、半ば自ら不利益を被っていく、ある種の（弱者）とも言うべき人間たちのおろかさ、悲しさを表している小説だと思倣せるだろう。さらに言えば、「僕」と野呂から利益を得ていく不破や陳の存在を通して、ある意味では（強者）とも言える人間たちの「老獪」さ、卑劣さをも表現していると言えよう。

「ボロ家の春秋」はこのようなモチーフをいわば表の顔として見せており、またそのような読み方をするだけでも十分に読み応えのある小説だと言つて差し支えない。

がしかし、「ボロ家の春秋」が発表された前後の時期に執筆された梅崎春生の作品を読むと、作者が当時の国際情勢に関心を抱き、小説の創作に積極的に活かそうとしていたことが確かめられる。この小説にも梅崎のそのような関心が少なからず反映されている可能性は高く、従つて中井氏が指摘するような日本国の問題にとどまらず、より広い世界にまつわる諷刺性を読み取ることもできるのではないかと推察されるのである。

二

梅崎春生は「ボロ家の春秋」より約一年前に「雀荘」（昭和二十八年六月「群像」増刊号）という短編を発表している。「古ぼけて、ガタガタの建物」であるスズメ荘を舞台にした住人たちの物語である。スズメ荘の家賃は「五十円」と安く、しかし権利金は「二千元」という高額であった。しかも管理人の「江草」という中年の女は住人から集めた「権利金」を持って、どこかに逃亡してしまふ。つまり、この小説の設定は「ボロ家の春秋」と大変よく似通っている。もっとも「雀荘」には六つの部屋に七人の住人が暮らし、二部屋に二人が暮らす「ボロ家の春秋」とはやや異なる部分もある。だが、玄関から見て「真中に一間幅の廊下がつき抜けていて、六畳の間が右に三つ、左に三つ並んでいる」というスズメ荘の構造は、板の間を挟んで「東側」に「僕」の部屋、「西側」に野呂の部屋があるボロ家のそれとやはり通じ合うところが認められよう。

ちなみに「雀荘」の物語は、「僕のスズメ荘での生活の第一期は、ここで終る」という一文で結ばれ、続編が予定されていることを匂わせていた。しかし「続・雀荘」なる小説は結局書かれていない。あるいは「ボロ家の春秋」こそが「雀荘」の続編であるのかもしれない。否、むしろ続編執筆にあたって、梅崎は設定やモチーフを大幅に練り直し、独立した

新たな作品として「ボロ家の春秋」を生み出したと言うべきかもしれない。いづれにしても「雀荘」は「ボロ家の春秋」の姉妹作と見做せるだろう。

この小説でスズメ荘内部の人物配置は次のようになっていゝる。廊下を挟んで左側の奥の部屋に主人公の「僕」、手前に河合という婆さん、真中に鬼丸修道という四十代の男とその妻が暮らす。そして右側の奥の部屋には知念という二十代の青年が、手前には椿という爺さんが、真中にはかつての知念の上司であり、左頬に大きな痣のある吉良六郎が暮らす。この中で何より興味深いのは、左側の真中の部屋に住む鬼丸を「共産主義の信奉者」、右側の真中に住む吉良を「新国家主義の確立」を目指す「理論的右翼」として設定していることである。しかもこの二人はスズメ荘における「両巨頭」であり、スズメ荘内で両者の「にらみ合いに似た状態」が続いていることになっているのである。

この二人のうち、吉良は知念に親分風を吹かせる上、右翼の塾を開く計画のため、知念と「僕」に酒と牛鍋を馳走して「懐柔」しようとする。鬼丸に至っては、六畳一間での妻との二人暮らしは狭すぎるため、両隣の河合婆さんと「僕」の部屋に自分の部屋の行李を少しずつ「侵攻」させて面積を広げようとする。そして彼の妻も「僕」に米や芋を貸して弱みを持たせた上に、お色気を使って悩ませる。また夫妻で「僕」と知念に酒を馳走して手懐けようとし、ついには「僕」を知

念との同室に追いやり、「僕」から部屋を奪い取ってしまう。このような「雀荘」について、日沼倫太郎氏は、特に鬼丸の隣室への「侵攻」に注目し、次のように書いている。

（前略）「雀荘」はひさしを貸して母屋を取られる式の、植民地化問題のパロディとして書かれたものである。これらの作品に、氏の（社会的関心）をよみとることはさして困難ではない。（「梅崎春生論」〈昭和三十二年十月「新日本文学」〉）

当を得た指摘と言えよう。しかし、その人物関係に注目した場合、「雀荘」はいま少し違った角度から、だがやはり国際社会の諷刺として読むことも可能ではないか。すなわち吉良と鬼丸、「両巨頭」の「にらみ合い」の状態は、当時問題になっていた資本主義陣営と共産主義陣営との対立、特にアメリカ合衆国とソビエト連邦との「にらみ合い」を寓意しているのではあるまいか。最も物語の終わり近くで鬼丸修道は「その主義信奉を捨て、吉良六郎とすっかり手を握り合」うことになっており、必ずしも米ソ対立の諷刺と読めない部分もある。しかし鬼丸が吉良に歩み寄ったことについて、「鬼丸の部屋の乗取り方は、共産主義的方法でなく、帝国主義的方法だったことを思うと、彼の転身も当然だ」と記されている。この言葉を考慮すると、梅崎はこのような形でソ連も、アメリカも、ともに「帝国主義的」であることを皮肉つたと解釈することも可能であろう。従って「僕」や知念らよ、キ

ソ両大国に翻弄される小国の姿を表していることと見ることもできる。

例えば作者が米ソの対立に関心を抱いていたことは、中野重治のエッセイ「梅崎春生君」（昭和四十年十月『文學界』）によって間接的に裏付けられる。中野はそのエッセイで、「梅崎は多分、戦争に連れ出されたこととの関連を抜きにしても平和主義者だった。ある時期梅崎は核兵器のことに首をつっこんでいた。ソ連とアメリカとの間の競争激化の時期（中略）だったと思う」と回想しているのである。

一方、梅崎春生は「ボロ家の春秋」から約一年半後、「侵入者」（昭和三十一年二月『新潮』）という短編を発表している。「写真班」と「植木屋」の二節から成る小説で、前節では主人公である「彼」の家に電気屋と写真班が現れ、後節ではやはり「彼」の家に植木屋が現れ、どちらも押し売りかベテン師のごときある種の侵入行為を働く様を描いている。梅崎はこの「侵入者」とほぼ同時期に、いくつかのルポルタージュや長編小説で、繰り返しアメリカの対日政策、ことに米軍基地問題について批判的な言葉を記していた。「侵入者」もそのような作者の関心の下で執筆されたようである。主人公の「彼」を日本国民と見て「彼」の家で侵入行為を働く写真班や植木屋たちをアメリカ合衆国として象徴させ、当時の日本の社会情勢を寓意的に表した諷刺小説の趣が強い。その「植木屋」の節の末尾には、特に注目すべき次のような文

章がある。

たくさんの樹が次々にどこからか彼の庭に運ばれ、彼の庭で一休みして、またどこかに運ばれてゆく。その過程を彼はちらと脳裡に組立てていた。中継地。貯木場。その想念は彼の頭をガンとどやしつけた。ああ、俺の庭は、俺の庭みたいに見えて、俺のために樹がたくさん生えているように見えて、ただそう見えているだけのことじゃないのか。何時の間にか売られて行く樹々の中休み場所がプールになって、つまり土地をただで使われているわけじゃないかと思つた時、彼は突然自分の顔から血の気がすつと引いて行くのを感じ、よろよろと濡れ縁によろめいて手をついた。

「彼」の家にしばしば現れ、次々と樹木を植えていく植木屋が本当は何をしていたのか、ようやく気づいた「彼」の感想である。ここで梅崎は、〈日本防衛のため〉という日米安全保障条約上のためまえにより、日本の国土を軍事基地としてアメリカに提供しながら、実際はアメリカの軍事戦略のためにそれを利用して日本の状況を皮肉っているように見える。この小説から約二年半前まで行われていた朝鮮戦争に際しては、日本の国土はアメリカ本土から朝鮮半島へ派遣される米軍の「中継地」として確かに用いられていたのである。（拙論「梅崎春生『侵入者』論―社会諷刺の小説―」

〔平成十五年十一月『近代文学論集』第二十九号〕

以上二つの小説により、この当時梅崎春生の関心の所在が如何なる場所にあつたか明らかであろう。その点を踏まえつつ、それら両作の狭間で執筆された「ボロ家の春秋」のモチーフを次に再考してみたい。

三

例えば「僕」と野呂がタロコ亭の陳根頑のもとへ、ボロ家を買収する契約を結びに行く場面には次のような描写が為されている。

両者とも終始黙々として、タロコ亭につくまで一言も口をきき合いませんでした。すでに戦いは冷戦の様相を呈し始めて来たのです。

また物語の終盤には次のような言葉も見られる。

(前略) まだ局面のはっきりした展開はなく、依然として冷戦の状態がつづき、時に小ぜり合いが起きる程度のみあります。

「僕」と野呂の関係のあり方を表すにあたって、「冷戦の様相」、「冷戦の状態」という言葉が用いられている。これらを見ると、ボロ家における「僕」と野呂の部屋の位置取りが、板の間を挟んで、前者は「東側」に、後者は「西側」に設定されていたことが何やら意味ありげに思い出されてこよう。もつとも、この小説のみで考えた場合、部屋の位置などは単なる偶然でさして意味は持たないようにも思える。しか

し、梅崎はこれより先に「雀荘」で吉良の部屋を「右側」に、鬼丸の部屋を「左側」に設定していた。作者による意図的な意味付けがそこに為されている可能性は高い。梅崎は「右翼」主義の吉良と「共産主義」の鬼丸の「にらみ合い」の状態を「ボロ家の春秋」において発展させ、「僕」と野呂の関係により、東西冷戦下の国際情勢を寓意しようとしたのではないだろうか。

さらに物語の末尾で、「僕」と野呂の意地の張り合いについて記した、次のような言葉がある。

(前略) なにしろ相棒が野呂のことですからねえ。修好を回復して団結してことに当ろうじゃないかなどとは、今までの行きがかり上僕からも言い出せないし、言い出したとしても野呂はその提案をせせら笑って一蹴するにまっています。もう僕らの憎み合い、嫌がらせのし合いは、すでに業の域に達していて、他人の言葉が耳に入る段階をはるかに通り過ぎていくのです。

「修好を回復して団結してことに当ろう」という、二国間の関係を表すかのような言葉が目につく。この小説が国際情勢を背景に据えていることを改めて感じさせる言葉の使い方である。加えて、不破や陳らに「無抵抗」な「僕」と野呂の関係のあり方を表す言葉としてそれが用いられていることを考慮に入れると、「ボロ家の春秋」はただなる東西冷戦の諷刺ではないらしいことが見えてくる。冷戦下において二国

間の「修好」が結べない故に大国に翻弄されてしまう小国の姿を、二人の関係をもって暗示しているのではないかとも思わせられるのである。そのことは、やはり物語の終わり近くに見られる次のような言葉に目を向ければ、さらにはつきりするであろう。

現在とても、最後の破局が明日来るか、一週間以後に来るか、あるいは現在のにらみ合いの状態がまだえんえんと続くか、皆目見当もつかない有様です。全くおかしなものです。僕ら二人は同じ被害者であり、現在でもある意味では同じ脅威にさらされているわけなのに、二人の努力はその脅威を取りのぞいて平和を取戻す方向には向けられず、お互いを傷つけ合うことばかりにそそがれているのです。

この言葉を当時の国際情勢と「侵入者」の末尾に表れた作者の関心の所在を念頭に置いて解釈してみると、「僕」と野呂の關係、二人が置かれていた立場から、〈冷たい戦争〉が〈熱い戦争〉に変わったと言われる南北朝鮮の衝突、つまり朝鮮戦争が想起させられはしないだろうか。

「僕」と野呂はともに不破から金を騙し取られ、陳から不当な要求を呑まされた「同じ被害者」であるのに、相争っている。一方、「僕」と野呂を利用して金を儲けた陳と不破は、二人の間で「十八万円」という、この物語の中でも最も高額な金銭の貸借が滞っており、実は両者は対立関係として設定

されていることに注意したい。従って「僕」と野呂の間に、ある意味不破と陳の〈代理戦争〉とも言うべき性格も持たされているのである。これは言うまでもなく、朝鮮戦争が米ソ両大国の〈代理戦争〉と呼ばれていたことと重なるのではないだろうか。さらに細部を見れば、例えば孫伍風を使つた陳の家賃の取り立ては、米ソの軍事力による威圧を表すうえで、また「僕」と野呂の部屋を隔てる「板の間」は、南北朝鮮の国境三十八度線の趣もあろう。

昭和二十五年六月から二十八年七月にかけて、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の両国は、まさにアメリカとソ連から「同じ脅威にさらされてい」たが、しかしその二つの国の「努力」は「その脅威を取りのぞいて平和を取戻す方向には向けられず、お互いを傷つけ合うことばかりにそそがれてい」た。「ボロ家の春秋」の発表は、その朝鮮戦争の休戦から約一年後にあたる。梅崎春生はまだ生々しかった二つの国の不幸な關係を、「僕」と野呂の同居生活という形で戯画的に諷刺してみせたと考えて決して大げさではないのである。かくて「ボロ家の春秋」は、一軒のアパラ家という狭い空間を舞台にしながら、さりげなく同時代の国際社会の問題を匂わせた側面を持つ。その諷刺性によって興行きのある深い読み取りを可能とする一作だと見做せるだろう。

おわりに

梅崎春生はデビュ作「桜島」(昭和二十一年九月「素直」)でより直接的に(戦争)を描き出し、いわゆる戦後派と称された作家であった。「ポロ家の春秋」はそれから約八年後に発表され、大衆文学を対象とする直木賞を受賞したこともあつて、文壇内外に意外な印象を抱かせた作品でもある。しかし本論で考察した寓意性を考慮に入れると、梅崎はこの小説において間接的に(戦争)を描き出したと考えることも可能にならう。「ポロ家の春秋」に認められるその諷刺性は、この小説の奥行きを深さを感じさせるとともに、梅崎春生の作家としての一つの成長を表すかのようである。

注(1) 第一章第七節「ポロ家の春秋」の周辺

(2) 第二章第四節「ポロ家の春秋」の周辺

(3) 梅崎春生は「保安隊航空学校見聞記」(昭和二十八年四月「群像」と「砂川」(昭和三十年十一月「群像」)の二つで、米軍基地について批判的な見解を記している。

(4) 長編小説「つむじ風」(昭和三十一年三月二十三日〜十一月十八日「東京新聞」)では、おもな登場人物の一人である猿沢三吉と妻ハナコが、アメリカの核実験を話題にした上で次のような会話を交わしている。

(三吉)「一体アメリカの奴は、日本を何と思っているんだらう。日本の政府も全くだらしがないな」

(ハナコ)「ほんとよ。今の政府なんて、アメリカ旦那のメカ

ケみたいなものよ。(中略)まるでメカケみたいに、へいこらして、言いなり放題になつてるのよ。沖繩問題にしたつてそうでしょ。腹が立つつたら、ありゃしない」

また、これも主要登場人物の一人である浅利圭介と妻ランコが、夫婦喧嘩をする中で次のようなやりとりをしている。

(圭介)「(前略)こちらの弱みにつけこんで、巧妙にたたみかけてくる。おばはんのやり方はまるでアメリカ的だ。すこし侵略的に過ぎるぞ」

(ランコ)「おや、何時侵略しました?」

「したじゃないか! 沖繩は返さないし、富士山は取り上げるし、砂川町や妙義山……」

「アメリカのことじゃありません! (中略)あたしのことよ。あたしが何時侵略したかというのよ。(後略)」

これらは、どちらも、ユーモラスな雰囲気作りのために記された感が強く、この小説の主要モチーフに深く関わる会話とは必ずしも言えない。しかし、梅崎が基地問題を始めとするアメリカの対日政策に批判的であったのを裏付けていることは確かであらう。

(5) 以上に考察した「ポロ家の春秋」の社会諷刺性について、本論の冒頭に記したごとく、「曖昧」だと見做す向きも存するかもしれない。しかし、これ以上この小説について、当時の政治状況との具体的な細部の一致を検討することは、必ずしも適切であるまい。あくまで「さりげなく」当時の国際情勢を諷刺し、作品世界に奥行きを持たせることに梅崎の意図はあつたと考えられるからである。

(6) 例えば中井正義氏は、梅崎春生が「ポロ家の春秋」で直木賞を受けたことについて、「芥川・直木」の二つをとりまわす可

にさして懸隔ありとは思わなければ、作品のかもしれない。梅崎はやはり芥川賞に値するものではあるまいか」と感想を記している（『「ボロ家の春秋」の周辺』）。

*梅崎春生の作品引用は全て新潮社版『梅崎春生全集』全七巻（昭和四十一年十月～四十二年十一月）によった。